

Title	日本語学校という教育現場で思うこと
Sub Title	
Author	張, 明(Zhang, Ming)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2022
Jtitle	日本語と日本語教育 No.50 (2022. 3) ,p.87- 92
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	刊行50周年 特集：修了生の現在 〔日本語教育の現場から〕 3
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20220300-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本語学校という教育現場で思うこと

張 明

筆者は2019年5月から都内にある日本語学校に専任講師として勤務し、もうすぐ3年が経とうとしている。まだ勤務年数は浅いが、日本語学校という職場から見られる日本語教育の現状や課題を少し記しておきたい。

第一に、日本語学校の学生のほとんどは4択問題の試験対策に時間を割いており、発話力やコミュニケーション力が不足している。現在勤務している日本語学校の定員数は888人で、大規模な日本語学校と言えるだろう。その大多数が中国籍の学習者であり、大学や大学院への進学を目指す学生がほとんどである。

大学や大学院に出願するときに、「日本留学試験」（以下、EJU）の最低取得点数を設定したり、「日本語能力試験」（以下、JLPT）の合格証明書を求めたりする大学は多い。日本の一流の大学や大学院に合格するために、JLPTのN1に合格することやEJUで高得点を取得することがまず必要で、筆者の勤務先の日本語学校もその対策授業を行う。しかし、たとえJLPTのN1に合格しても、EJUで高得点を取得しても、口頭でも文章でも自分の言葉ではうまく表現できず、相手に伝えたいことを理解してもらえない学生は多い。また、自分の意見を口頭にせよ文章にせよ表現する際に、完全な文にすらなっていない学生も多い。上級クラスにいる学生でも、学校の事務所の先生に、「在留カード」と一語文でしか言えず、在留カードをコピーしたいのか、受け取りたいのかわからない言い方になる。確認すると、「コピー」と、ワードレベルでしか表現できない。「在留カードのコピーをお願いします」という完全な文が表現できる学生は多くない。

その課題を解決することは決して簡単なことではない。初級クラスでは初級教科書の文型や語彙の習得に重点を置き、中級クラスでは EJU や JLPT の対策が中心になる。初級や中級の授業中に会話・発話練習を入ると、学生から「まだ JLPT に合格していないのに会話の練習はいらない。JLPT の対策授業にしてほしい」とクレームが来る。上級レベルにまでならないと、発話力やコミュニケーション力の育成はなかなか難しいのが現状である。

第二に、日本語学校の学生は受動的に授業を受け、積極的に授業で発言する意識が高くないという問題がある。質問する力がほとんどないと言っても過言ではない。この問題の原因もいろいろ考えられる。先ほど指摘したこととも関連があるが、授業自体が練習問題やドリルの答え合わせや、教師による一方的な説明になりがちで、学生の発話はそもそも少ない。また、発表やプレゼンテーションの授業があっても、ほとんど発表・プレゼンテーションの学生だけが発話し、聞く人は本当に聞くことに徹する状況になりやすい。聞く人には質問をさせたり、発表のどこがいいのか、どこを改善すればいいのか、コメントさせたりする練習も徹底的に行う必要がある。

第三に、日本語学校では、初級は総合教科書を使用し、初級の文法項目を教えるが、中級以上になると、文法の授業では主に JLPT の N2 と N1 の文法項目を教える。そのため、文法項目の体系的な習得ができていないという問題がある。

例えば、指示表現は『みんなの日本語初級 I』¹ の第 2 課でいわゆる現場指示の対立型を教えるが、その後文脈指示を教える機会はない。学生が上級になっても、文章の中の「この」と「その」の違いがわからない。また、日本語能力試験 N1 合格者でも、「ディズニーランドに行ったら、電車がいい」「ディズニーランドに行くと、たくさん写真を撮る（撮りたい、撮るつもりだ、の意味で）」というような不適切な文を産出する。その理由は、4 つの条件表現「ば」「と」「たら」「なら」の使い分けを学習する機会

が中級以上のレベルには存在しないのが原因の1つだと考えられる。『レベルアップ日本語文法中級』²という教材のように、「指示表現」「条件表現」というようなトピックを中級以上レベルの授業で取り上げ、発話や文章による意思伝達につながるように、文法項目の用法を体系的に整理し教える必要がある。

第四に、上級レベルを対象とする聴解指導の教材が少ないという問題がある。聴解のみならず、総合教科書も含めて上級レベルの教材はそもそも少ない。日本語学習者のニーズは多種多様で、必ずしも上級レベルを目指すとは限らないため、初級レベルの学習者より、上級レベルの学習者ははるかに少ない。漢字・語彙や読解に関しては日本人向けの国語教材もあるので、中学生や高校生が使う国語教材を利用すれば、カバーできる面もあるが、国語教育では聴解という単元がなく、利用できるものが少ない。また、特に中国人学習者は、言語知識（文字・語彙・文法）や読解より、聴解が苦手で、聴解の授業を増やしてほしいという要望が多い。

さらに、新型コロナの影響で休講になることによって十分な学習時間が確保できない学生や、当初の予定より半年以上遅れて入国した学生のために、入国管理局から在留資格の延長という特別な措置が取られ、通常2年が限度であるところ、3年以上日本語学校に在籍し勉強する学生が2021年度から出てきた。3年目のクラスではこの1年間で聴解の授業をしていないクラスもある。市販している教材、使える教材を全部使ったからである。現段階では、「留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ聴解」シリーズ³や「ニュースの日本語聴解」シリーズ⁴くらいで、上級レベルの聴解教材の開発も必要があるかもしれない。

第五に、中国人学習者を対象とする漢字指導も課題である。日本の漢字と中国の漢字は異なる点が多いが、漢字の形の認識や漢字を書くことは決して難しいことではない。中国人学習者を対象とする場合、漢字指導はどこに重点を置くかは問題である。

日本語学校の初級クラスでは、漢字を教えているが、中国人学習者に対しても筆順の説明や、「十」「百」「田」などの漢字をひたすら書かせる練習をする。つまり、日本人の小学生と同じように漢字を教えている。それは本当に必要だろうか。また、「講」を“讲”、「銭」を“钱”と書いたら、それは×でいいと思うが、「天」を“天”、「春」を“春”、「花」を“花”と書いたら、それも×にする。そこまでする必要はあるだろうか。学生からは「漢字は中国人が発明したものなのに、なんで日本人に漢字の書き方をダメ出しされなければならないのですか」という文句はよく聞く。中国人学習者を対象とする漢字指導は、筆順や字体ではなく、読み方なのではないだろうか。中国人学習者が漢字語彙を読めないというのをよく同僚から聞くし、自分の授業でもそう感じている。しかし、初級の段階で、筆順や字体にとらわれすぎると、学生から日本の漢字に対する抵抗感が生まれ、読み方の指導にも余計な支障をきたす。中国人学習者に漢字語彙が読めるように、初級からの漢字指導のどこに重点を置くか、さらに検討する必要がある。

第六に、教科書を教える教師がまだまだ多いという問題である。筆者の勤務する日本語学校では、シラバスやカリキュラムなどは専任講師のほうで決めて作成し、非常勤講師はそれに基づいて各曜日の各クラスの授業を進める。しかし、それは指定された教科書の内容と順番をきちんと守ってそれに沿って教えるという意味ではない。教科書に書いてあることだけを一字一句教える（「教科書を教える」）のではなく、あくまで教科書はメインの教材として使い、状況や環境に応じて教え方を工夫する（「教科書で教える」）とすべきである。

学習者に「教科書で教える」というのは、授業の目的や、教科書の到達目標をしっかり認識し、クラスの特徴や問題点に基づいて、順番を変えたり、内容を取捨選択したり、情報を補ったりするなどの工夫が必要になる。また一方的な説明ではなく、自作のワークシートを活用したり、グループ

ディスカッションを取り入れたりするなどの方法を変え、学生の学ぶ喜びを引き出す。45分の授業だから教科書の2ページを進める、90分の授業だから4ページという考えではなく、同じ2ページの内容でも、30分の授業にも45分の授業にも90分の授業にも、教える側の工夫とアレンジがあれば、十分に対応できる、というのが筆者の考えである。教師側からの「この授業は時間が余るから、量を増やしてほしい」というような反省も、学生側からの「この授業は自分で本を読めばいいのではないか」という意見も、おそらく教師側が「教科書を教える」ことに起因していると考えられる。教師側も自分なりの個性を出しながら、工夫していただきたい。

最後に、日本語学校の教員の待遇について述べたい。日本語教師の給料はとにかく低い。それは筆者の勤務先の給料が低いという意味ではない。むしろ、現在の勤務先の給料は、全体的にはわりと高いほうだと思う。特に専任講師の場合は、授業をするというのはあくまでも仕事の1つであり、そのほかにはクラスの運営や、進学の指導、出席率の管理など業務が多岐にわたる。それらの業務に使う時間は勤務時間のほとんどを占め、授業準備は平日の夜や土日などの勤務時間外に自宅で行う人は多いのではないだろうか。また、先ほども述べた通り、いい加減な授業をしたくないので、工夫やアレンジを考えて、試行錯誤しながら準備するため、1つの授業に費やす準備時間は決して少なくない。そう考えると、日本語教師の仕事の量の多さがわかる。その仕事の量の多さを考えると、決して高い給料ではない。なかなか解決することが難しいと思うが、日本語教師の待遇アップは多くの日本語教師が望むことではないだろうか。

以上のように、日本語学校という職場から見られる日本語教育の現状や課題を少し記しておいた。本来ならば問題点だけでなく、解決策も提案したいが、現時点ではそこまでの力が及ばず、今後の課題としたい。また、上記の内容はあくまでも筆者自身が感じた問題であり、一般化しているわけではないことを理解していただければ幸いである。

注

- 1 『みんなの日本語初級Ⅰ 第2版本冊』（スリーエーネットワーク、2012）
- 2 許明子・宮崎恵子著『レベルアップ日本語文法中級』（くろしお出版、2013）
- 3 東京外国語大学留学生日本語教育センター著『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ聴解中級』（スリーエーネットワーク、2013）、『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ聴解中上級』（同、2014）、『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ聴解上級』（同、2015）、『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ動画で学ぶ大学の講義』（同、2019）
- 4 瀬川由美・紙谷幸子・北村貞幸著『中級からはじまるニュースの日本語聴解 40』（スリーエーネットワーク、2013）、『ニュースの日本語聴解 50 中級後半～上級レベル』（同、2010）

経歴

張 明（チョウ メイ）

中国山東省出身

2012年7月に曲阜師範大学（中国）東方言語・翻訳学部日本語学科卒業

2015年3月に慶應義塾大学大学院文学研究科国文学専攻日本語教育学分野修士課程修了

2019年3月に学習院大学大学院人文科学研究科日本語日本文学専攻より、博士（日本語日本文学）の学位を取得し、博士後期課程修了

博士学位論文題目「現代日本語における字音接辞の研究—連体詞型字音接頭辞の記述的研究を中心に—」

2019年5月に早稲田文化館日本語科教務部専任講師に就任

現在に至る。